

私たちの宝物

宮部鼎蔵像（御船町立七滝中央小学校所蔵）

御船町

幕末の時勢に多大な影響を与えた

「勤王の志士」宮部鼎蔵

みやべ

ていぞう



宮部鼎蔵は、文政3年（1820）4月、宮部春吾・ヤソの長男として誕生しました。

宮部家は代々医者の家で、鼎蔵は幼い頃から藩の叔父の伝右衛門のもとで文武両道に励み、14歳で藩校・再春館の師範・富田家の私塾に入門。医学の修行に入ります。

家族に厳しく教育された鼎蔵は、31歳で熊本藩に召し抱えられ兵学師範となります。

この頃から勤王の志を高め、嘉永3年（1850）肥後を訪れていた吉田松陰に対面。鼎蔵31歳、松陰21歳でした。

翌年、江戸に出府し兵学に磨きをかけると同時に、松陰と親交を結び、尊皇攘夷への信念を深くしました。

やがて国学者の林桜園が開く原道館に入門し、勤王の志を更に高めていきます。

元治元年（1864）、京都に潜伏した鼎蔵は、筑後の真木和泉らと尊皇攘夷派の勢力回復を目指し、同年6月5日、同士20数名と三条小橋の池田屋で会談中、その情報を察知した新撰組に襲撃され奮戦し、自刃。45年の生涯に幕を閉じました。明治維新のわずか5年前でした。



鼎蔵と松陰

嘉永3年（1850）、九州に遊学した松陰は、鼎蔵と出会います。

二人は初対面で意気投合し、2日間にわたって時勢について語り合いました。

嘉永4年（1851）には、二人で120日間におよび東北遊歴をするなど、松陰は鼎蔵を兄のように慕いました。

安政元年（1854）、松陰は鼎蔵に海外密航の決意を明かしますが、鼎蔵は時期尚早と止めます。

しかし、松陰の決意の固さを知り、自分の愛刀と

藤崎八幡宮の神鏡、そして

「皇神（すめかみ）の

まことの道を

かしこみて

思いつつゆけ

思いつつゆけ

という一首を贈り、松陰を激励しました。

安政の大獄で松陰が処刑されるまで、二人は手紙で国の行く末を語り、志を共にしました。

【地域の声】

命がけで日本を変えようとした人。鼎蔵先生の勇気をこれからも伝えていきたい。（七滝中央小学校 6年生男子）

鼎蔵と松陰は同じ兵学を学んだ無二の親友。松陰の傷んだ刀を鼎蔵が自分の新しい刀と取り換えてあげたほど。二人が1852年冬に遊学した東北の道を実際にたどってみたが、雪で進めなかった。二人の意志の強さに驚いた。（宮部鼎蔵没後150年シンポジウム参加者）